

ナン氏の教育説

伊 藤 猷 典

T. Percy Nunn 氏の經歷、人物等に關しては何も知らない。只九月の初めに小西先生から教育學會の例會に紹介せよとて示された同氏の著 *Education: its Data and First Principles*. 1920. に依

はあるが然し寡聞なる自分の知る範圍では未だ日本には紹介されてないやうだし、學説も暗示を與へるに足るものがあると信ずるから左に要點を摘録して見やう。

て窺ひ知るのみである。これによると氏は目下ロンドン大學の教育學教授であり、著書としては前記の外に *The Aims and Achievements of Scientific Method* *The Teaching of Algebra* 等ある由である。學説は生物學の立場から立てられてある。序文には「從來なされた事を繰返したので、それを改良しなかつた點に關しては辨解の辭がない」と云つて

一、教育の目的。「人生に於ける諸般の事物は各個人の自由活動に依てのみ進歩するものである、従て教育過程は此の理に基ひて行はれねばならぬ」。個人に對する社會の要求も個性を尊重する時に於てのみ最もよく滿されるのである」と主張し、其の論據を次の様に説明してゐる。

個性の發達を理想とせねばならぬ事は人生と藝

術的作品とを比較して見れば判かる。美的創造の目的標準が個性を表はず事に存する事は何人も認むる所である、その活動が作者の有する個性を其の形式に從て充分に表はずものなる事、その爲めに雑多の材料を集めて統一し、統一の出來なき時は失敗する事、又自動的であつて其の材料を用ゆる場合に當て外界の方則に支配されない（詩人が文法を、音楽家がコードの方則を、畫家がモデルの形式を無視するといふのではない）事等は周知の事實である。生活の理想としての個性につきても同様に全體として見れば自動的であり絶えず統一に向て進んで行くものである。小は食事の際に小刀、ホークを取る事より大はナポレオンの世界大の仕事に到る迄、テンプルの如き一寸した事物を見る事より遊星の運行、哲學の體系を組立てるに到る迄、それでないものはない。而して此の事は精神のみならず身體に就きても同様に言ひ得るの

である。動物植物に就きても言ひ得るのである。だから身體を説明するに際し生物學者の如くに身體は非常に複雑な物理化學的機械に外ならない、其の究極の要素は炭素酸素窒素等の化學的要素であるといふのも當を得ておらない。精神物理並行論も不可である。真相を捉へた物はペンシルバニア大學のジュンニシグ氏の有機體の説明である。「動物の生活は物理、化學的要素から成立ておる、が然し其の行動は單なる物理化學的機械以上なる事は恰も詩が文法に由て作られながら而も文法的表現の總計よりもより以上のものがあると同様である。最下等動物と雖も自動的である。其事はラツバ蟲の行動を見てもわかる」と云ておるのが本當である。人間はデカルトのいふ如く自動機械に精神の加つたものでもなく、エピクテツスのいふ如く死體に靈の入つたものでもない。徹頭徹尾單一の有機體である。最新の言葉で云へば身體―精

神である。それが唯物論と異なる點は知覺・思考・感情・意志をば機械に對する餘分な附加物としない

事である。倫理や宗教の要求するものを精神が保持するものとし、身體を精神化して精神を物質化しない事である。要之最下等動物と雖も物理化學以上のものありとすれば生活の歴史をば個性を發揮する爲の努力として眺めるやうになる。且つ全人類の向て行く目的を見る事に依て人間の幼時に於ける教育の真相が明瞭に理解されるのであると而して氏は此の立場から次の如き二個の重要な結論を出してゐる。曰く、【一】生物學的の事實を明確に理解する事からして、自然に従ふ唯一の教育は個性を養ふ事を目的とする教育である。【二】個性を精神に限る事は其範圍が餘りに狭すぎる、個性は全有機體又は身體精神の事であると。

二、個性の要素。「個性の要素」と明言はしてゐないが、そして章も澤山に別けて説明してあるが

今は紹介の便宜の爲に斯かる見出しを作て其下に説明して行く事とする。

凡て有機體の活動は二方面に分かれる。過去にあつたものを保持して行く方面と、それを新らしく作り變へて行く方面とである。例へば科學者が前代にありし諸説を研究する面とそれに基づいて新説を發展して行く面とに分れる如きである。ナン氏は此の過去にあつたものを保持して行く方面をムネミック (mnemic) と呼び、かゝる生活素をムネメ (meme) と稱し、新説を開展して行く方面をホルミックと呼び、その生活素をホルメ (ogme) と稱してゐる。而して斯く新しい名を附した所には次の事情によるのである。

前者をば Samuel Butler は無意識的記憶と呼んだ。即ち舊慣、身體的の發達・生物學的の機能・本能・遺傳等の現象は記憶の中に最も明瞭に表はれたものとして考へる事によりてのみ了解する事が

出来る、**之**を無意識的記憶と呼んだ。然し誰か蟹の祖先が**缺**を發明し、其の子孫は其祖が斯くなしたといふ事を「記憶するが故にそれを繼續して發展する事が出来るのだといへやう。でバットラ」の云ふ現象を獨の生物學者リカード・セモンに従つて前記の如く呼ぶのである。記憶は意識的ムチメである。

後者に關しては心理學者は之を無意識過程と呼ぶ。だが意識的**道程**である**讀書**ですらも其の作用中には無意識的の**眼の運動及び適應**を含んでゐる。讀書中における讀者の**眼は單なる機械**でなく**生活せる有機體の合目的の行爲**であり、責任ある自動作用である。尙其上に**讀書中は頭を高く掲げ、消化腺は出来る丈少なく分祕し、淋巴球はインフルエンザの桿狀菌の侵入を靜かに防ぎつゝ、ある。然し此等を稱して意識的と稱する事は出来ない。此等は餘りに識闕下にある故に。**

故に自分は之に對してホルメと稱する名を與へる。有機體の合目的の課程は總てホルミツクの過程である意識的過程は其の一部分である。

而して此のホルメとムチメは人間の個性の發展を分解する際に其の案内者となるものである。故に此の兩者に就て稍詳しく説明する必要がある。

イ、ホルメ。吾人は總ての行爲に就て**明暗**の中に自分は自分として**獨特の存在**である、自分は自分の道を進んで行つて單に他人の道を進むのではないといふ態度を持つてゐる。そして此の態度はアミバーに到る迄有する所である。而して此の自己確持の作用は二方面に分たれる。即ち保存と創造とである。數學者は乗法の九九を自由に取扱ふ事に由て新説を發明し、科學者は舊説を變形し、發展する事に依て進み、美術・音樂・詩歌の新進作家は舊き方法を作り更へ新らしく結合するのみである。要するに保存と創造が自己確持の要素である。

甲の人の活動と乙の人の活動との差は此の二者の有無に非らずして二者の何れが優れてゐるかに依存するのである。創造的活動の最も典型的なるものは發達てふ現象である。各種の動物は單一の細胞から起て漸次に作りあげて遂に特長ある形式となる。社會の組織・法律・政府・藝術・科學等も凡て休みなき創造的の力から起たものである。盲目で啞で聾でも文學者であり哲學者であるヘレン・ケラーは智力や人格が周圍の事情を離れて如何に獨立に發達し得るかを示す好個の例である。

軍隊や教會が階段をなして各自が其上官に屬してゐる如くに有機體に於てもホルメの過程は階段をなしてをる。例へば友人を訪問せんとする、爲めに自轉車に乗らんとする、乗る場合には又四肢軀幹等の多數の運動を含む……といふ風である。

此の過程は單なる心理的の無意識的の状態から意識的の状態に移つて行く。これに依て兒童は益

々獨立の境に到るのである。又他面には其補助的發達として益々複雑な組織となる。これによつて個人は益々價值ある活動を表はすに到るのである。

該過程は複雑なるのみならず表現的のものである。巧な畫家の筆になる風景畫は眞の風景其物よりも一層表現的なる如くに該過程より起つたものは一層表現的である。

又ホルメの組織は精神分析學を研究する事によりて一層明かにされた。意識的の活動の下に無意識の部分が澤山にある。大人の精神は見へる部分である。表面である其の下に幼年時代からのホルメの要素が無數の層をなしてをる。

(ロ、ムチメ。我々の意識的生活の中には記憶てふ名の付せられないものが澤山にある。例へば印刷物を見て過去の經驗を直接に意識する事なくして而もよく意味を了解し、友を見て友と知り、音

樂家は自動的に手を弦の上に走らす如きそれである。で此等をも稱してムチメとする。記憶は其の中の特別なものである。

ムチメの作用を容易に理解せしめん爲めに例を取て見る。犬が一度石で撃たれると、次に人が靴の紐を直す爲に前に屈んだのを見ても逃げる。それは石を投げる知覺と打撃の感情と苦痛恐怖に由て起された逃亡の經驗とが。一。緒。に。な。り。て。經。験。さ。れた爲めである。前に屈む事の知覺苦痛逃亡の感情が相並であるのでなく全體が一つになりて有機體中に保存されてゐるのである。で其の中の一が起れば他のものも全部活動して來るのである。

又詩を吟ずる場合に一句をいふと次から次に出で來る事、又はピアノを奏する場合に手の調子がつくと次ぎ／＼に手が動いて行く如きも同様の理由によるのである。

生物學上にもかゝる説明が用ひられる、例へば

犬に鈴を鳴らして二分間後に食物を與へる習慣をつけたとする。すると鈴さへ鳴らせば食物を與へなくとも時に唾が出る事がある。此の事を生理學者は説明する事出來ないが自分の説き方にすれば雜作なく解ける。

此の説明は有機體の生長にも適用出來る。胚種は有機體に先達つ或者でなく有機體の第一階段に於ける状態である。胚種から大人に成る迄の身體的發達の課程は詩を吟じ音樂を奏する場合に記憶から引續き出て來ると同様である。只兩者の差は吟誦や演奏のムチメの基礎が個人の生活の間に獲得せるものなるに反し身體的生長の場合には個人の祖先に於て既に植付けられた復合記憶を表はす點にある、卵が二つの細胞に分れるのは詩の初の句を思出すのと同様である。

動物の本能に就ても同様の事が云はれる。例へば巢を作る如き、適當な材料が目につくとそれが

導火線となつて巢を作るのである。妻も母になると思想感情等が變化して來る。

夢も遠き祖先の思考の復活である、種族的の想起である、只此の生活の條件の爲めに意識に上らない迄である。それが夜夢となつて表はれて來るのである。

此の説に一層の方を添へるものは繰返説である。

猶一言すべき事はベルグソンやマクヅェガルの説である。ベルグソンは眞の記憶と機械的聯想との間に根本的の差異を認めた。マクヅェガルは小供が過云の出來事、景色などを完全に容易に記憶するのとイロハを學ぶに骨を折るのとの間に差がある。二氏は共に兩者の差を説明しないが機械的聯想は身體、主として神經組織に關係し、眞の記憶を精神力に關係しておるものとしてをる。要するに機械的聯想は身體に眞の記憶を身體中の靈

に歸してをる。即ち機械の中に惡魔の不可思議の助けを呼起したものである。自分は斯かる身體的現象を機械視する説を取らない。

ハ、ホルメとムチメとの關係。此の二者は論述の便宜上分離したので元來は有機體の活動の方面に就て付けたる名である。生活の本質である保守又は創造の方面をホルメと呼び、個人又は種族的歴史に依て作られたる方面をムチメと呼ぶのである。そして後者は前者の活動する乗物である、科學に於て哲學に於て乃至は政治・宗教・道徳に於ても何れも舊きものゝ上に築きあげたものであつて全然新らしきものから出來たものはない。人及び社會が一層高等のものに進んで行く際に踏む飛石は死したるものでなくて現に活動しつゝあるムチメである。此事は人間の發達の跡を見れば容易に理解される事である。猶日常の生活に於ても數多の例がある。手紙を書く場合に文字を綴りペンを

動かすのはム子メである。此のム子メに基ひて愛憎を表はすとか又は他の目的を表はすホルメが現はれるのである。ム子メの集團は例へば鑄型の如きものであるホルメは其の中で動き其處から出て一定の形及び内容を取るのである。

一文章を草するに當てその結果が如何になり行くかを豫め知る人はない、最初は或る特殊な復合體(ム子メを指す)の興奮に初まり、此の復合體が初めから終り迄の進路を支配し、且つ此の復合體は進行中に其自身の創造的活動に依て變形して遂には屢々全く新らしきものとなり、自己維持の新運動の出發點たるべく適したものとなる。

心理學は此の復合體の指導作用を決定的傾向と呼んでをる。けれどかゝる現象は決定的傾向は復合體のホルミック作用であるといふ假定によらなければ説明が出来ない。

次に記憶は頼み難いものである。ともすればよ

く誤まるのである、誤て他の事と置換へるものである、特に子供に於て著しい。だが此事は記憶と想像とが根原を同じくし、常に密接に結び付いてゐる事を示すのみならず、我々の行動のム子メ的基礎は常に自己維持をしてより有効に、より鋭敏に、一言で云へばより表現的(ホルメ的)にせんとする傾があるのである。

又、普通の人は吾人の生活を決定して行くものは意識に表はれたるものと思ふがそれは誤まりである。生物學の立場から云へばそれは一部分をなすに過ぎない、意識の背後には澤山なホルムの組織がある。此種の事はゼームスも認めたのであるが、最近に精神分析學が行はれるやうになつて一層明かになつた、アイチスト、ジョンが職業に就いた人の精神分析を行つてみた。建築家・彫刻家・料理人等各種の人に就て行つた。すると彼等は曰く自分が考へてゐる意識的のもの以外に猶他の要素が

職業の撰擇を決定するに與つて力があつた。そして外部からの勧誘とか機會とかいふものは例令重要であつたにしても、初めから存在する隠れたる者の表はれるに當て口實となつたにすぎない。

此の無意識的要素が人々の興味の方向を支配するのである。そして此の要素は劣等なものより高等のものに移り變るのである。此の場合にホルメが再構成されるのである。だから教師が兒童の意識下にある不純のホルメを發見して之を善導する必要がある。少年犯罪者の治療は之に待たねばならない。精神分析の事が個性の自動的發達に大に有効であつた事は記録に徴して明かである。從來の人々が單な倫理道德を説いても效能の表はれなかつた事は無理からぬ事である……云々」と。

かくホルムとムチメとを擧げ且つ識國下にあるもので吾人の活動を支配するものある事を力説してをる。

氏は更に進で慣習・儀式・遊戯・教育に於ける遊戯的方法・模倣・本能・自我の發達・智識の開展・學校と個人等の章を設け近代に唱導せらるゝ殆ど總ての教授法訓練法を網羅して氏の説の立論の支柱としてをる。然し此等は多く集めたといふだけで餘りに珍らしくもないから省く事にして最後に自分物が物足らなく感じた事と善いと思つた事を簡單に附記して筆を擱く事にする。

三、批評。(イ)、短所。氏は個性の自由を説く所で自由のみが個性をして完全に發達せしめる事が出来るのだ、自由は總て善をなす條件である、自由を離れては義務も意味なく、犠牲も價値ない、實に自由は同胞相愛の根底であり、神の國を立つる基礎である……」と所謂哲學者風に言つてゐるのは何だか物足らない。彼の立場を徹底する爲には生物學心理學などから論證すべきではなかつたか。

又各兒童の教育の目的を決定するにあたり兒童の模倣と本能とに基ひてゐるが果してそれだけで出来るか、バグレーの言を假りて言へばダイナマイトには爆發する性質がある、然し其の性質を何に利用するか岩石を崩壞する事に使用するか暴君の暗殺に使用するかは社會的の要求に従はねばならない。ダイナマイト自身だけではわからない。で兒童の教育に當ては個性の調査と同時に社會的要求を研究すべきではないか。

個人對社會の關係に就ては「個人が社會に對して犠牲となる場合、極端には生命迄も棄てねばならぬ場合がある、若しそうならば個性發展の原理を弱めはしまいかとの問に對して自分は答へる、人類は現存せる惡に求久に堪へねばならぬようになされてない、それを逃れんとする意志があれば其處に道が開けて來る」と云つてゐるのは氏の立場としては科學の世界から一躍して宗教の境へ飛

んだ感がする。

(ロ、長所。前にも記した如く最近の學説を多數記載し關係せる書籍名も記載し簡單に批評が加へてあるから初學者が教育學の一斑及び最近の情況を知るには好都合の書である故に著作が出版の目的にはよく適つてゐると云はねばならない。

學説としては創作と稱して何でも珍らしいものさへ出せばよいと思つてゐる連中に對して模倣の必要な事舊慣の必要な事を説いたのは大に嘉みすべき事である。

又、從來は徳育としては意志の事が喧しく言はれた。その必要な所以として歴史的の人物等の例證はあつたが心理的の深き分拆を聞かなかつた所が氏はかゝる抽象的の言を用ひないで人間の發達を心理的に解剖して個性の岐かるゝ所以を調べてそれに基づいて教育せねばならない(勿論氏の創めたものではないが)、意識的の部分よりも無意識

の部分の教育に着眼せねばならないと説いてゐるのは特記すべき事項である。

寄贈書籍雜誌

三論集綱要

文學博士 前田慧雲著
東京 丙午出版社發行

宗教哲學の本質及其根本問題

文學博士 波多野 精一著
東京 岩波書店發行

文化科學と自然科學

(リツカート著)

文學士 近藤 哲雄譯
東京 大村書店發行

二程子の哲學

文學博士 宇野 哲人著
東京 大同館發行

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、學校教育、教育、内外教育評論、教育學術界、教育界、教育研究教育時論、幽り事、佛教學雜誌、佛教大學通信講義。